

定時制高校での人形劇によるソーシャルスキル向上をねらいとした授業実践

小坂浩嗣*, 辰巳敏夫**

(キーワード: 定時制高校, 総合的な学習の時間, 人形劇, ソーシャルスキル)

1. 問題と目的

少子化が進み、親は今まで以上に子を大切に、とことん子どもに関わるようになった。それ自体は自然なことであり、決して悪いことではないが、そこには一つの落とし穴が隠れている場合がある。家庭という、子どもにとって最初の「社会」の中で自己を容認され保証された子どもは、次の学校という「社会」で全く経験の無い他者との出会いをし、そこで初めて自分が先天的かつ無条件に保証されていない現実と直面する。そこには強烈に自分を否定する要素もあるかも知れないのである。そのことに免疫など持たない子どもは、自分を保証してくれない社会から逃げ出す他ない。そして家庭の中に逃げ込む。全ての生徒がそうなるわけではないが、そういう過程もあると念頭に置いて、子どもと接し、子どもの社会性を拓いていくことも大切な私たちの仕事であると考えている。そのためには徹底的に子どもを守ること(安心・安全な学校)、その上で他者との積極的な繋がりが持てる状況を作り出すこと。これさえできれば、後は子ども達が自然に伸びていくと確信している。

そして、そのようにして生まれたしなやかな社会性は、将来の自分の人生を作り上げていく土台となる。とにかく今の生徒は、他者と接することを苦手とする者が多く、特に自分に対する評価(言葉でも態度でも)については、その内容に関わらず、非常に敏感で容易に傷つく。そこから社会性が未熟であることが見て取れるが、他者と向き合い、対峙できるようになるためには、他者と接する好ましい経験を重ねるのがベストであろう。文部科学省によると、学校教育は「学校から社会・職業への円滑な移行」、生徒の「社会的・職業的自立」に課題が見られると分析されている。これらは現場の教員としては以前から痛感していたことでもあり、この問題に対処すべく、それぞれの学校が様々な試行錯誤を続けているものの、そう簡単に特効薬は見つからない。しかしより良い方策を探す努力は続けていかなければならない。この点を踏

まえ、授業の中ではあるけれども、日頃あまり接点のない生徒同士がひとつの作品を作り上げていくという共通の目標の下に集まり、様々な出来事を経て纏まっていく経験過程には十分に意味があると考えている。もちろん上手くいかないこともあるが、それでも生徒達は個々に成長して行く。何より肝心なことは、機会を与えること、場を与えること、安心を与えること、に尽きると考えている。

そこで、本稿では中学時代にいじめや不登校を経験した生徒たち等を対象に、総合的な学習の時間におけるキャリア学習の授業を実践し、ソーシャルスキル向上の効果とキャリア学習における授業実践の意義について検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 協力校

協力校は徳島県唯一の定通独立校として、昭和53年4月に徳島市内の吉野川河口に近い場所に創設され、今年で42年目を迎える。定時制課程は昼間部午前部・午後部、夜間部と3部制となっており、通信制課程には普通科と衛生看護科の2科がある。県内には定時制課程がある公立高校は本校を入れて6校しかなく、通信制課程は本校のみである。生徒数は定時制夜間部が普通科4クラス、27名、昼間部が午前部、午後部合わせて普通科11クラス、237名、通信制課程が普通科10クラス、衛生看護科1クラス合わせて293名、全校生徒数は557名になる。

定時制の生徒たちに「自分の教室、自分の机、自分のロッカーを使わせてあげたい」という思いから本校が定通独立校として創設された。設立当初は工業科・商業科・家政科・衛生看護科と多くの科があり通信制課程には2,000人を超える生徒が在籍し、生徒総数だけでみれば4,000名近くになる県内一のマンモス校であった。

平成時代を迎え地方の少子化・高齢化が進むにつれ、

*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教職系)

**徳島県立徳島中央高等学校

高校入学者数の減少が加速度を増し、全日制高校の整理統合が進むと共に定時制・通信制への希望者も激減した。それに伴い定時制課程の再編成も行われ、本校は普通科のみ（通信制課程では衛生看護科が残っている）となり、かつては最大規模であった夜間部が今では最小規模になっている。

そのような夜間部の縮小に呼応して、昼間部は増加している。それとともに、生徒の有り様にも変化が見られるようになった。いわゆる「やんちゃ」して学校に行けなかった非行傾向のある生徒はどんどん減っていき、不登校に陥って学校に通えなかった子ども達や、特別支援が必要な生徒の割合が、年を経る毎に増加してきた。必然的に学校の指導のあり方も在籍する生徒の実態に応じて変化してきており、基本的に対人関係を築くのが苦手

な生徒たちにどうやって社会性を持たせていくかが最重要の課題となってきた。

(2) 方法

1) 総合的な学習の時間の位置づけ

上記のような現状を踏まえ、生徒自ら考え、未来を切り拓く能力・態度の育成が図れるよう、年間4回の進路ガイダンスや「総合的な学習（探究）の時間」科目におけるキャリア教育に特化した学習活動等の展開を系統的かつ体系的に実施している。また、社会・職業への現実的理解を深め、将来に向けての目標設定や社会に参画する意識を醸成すべく、インターンシップやキャリアワークショップ等の様々な体験的な学習活動に取り組んでいる。

協力校では、令和元年度に文部科学省から指定を受けて「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」に取り組んだ。1年次に「自己理解」、2年次に「啓発的経験とコミュニケーション」、3・4年次に「就職活動・進学準備」という形で系統的にキャリア教育を行っている。1年次では『高校生のキャリアノート』（ベネッセコーポレーション）を活用した演習に加え、「読み・書き・計算」といった基礎学力の養成と定着を図り、2年次から4年次では、キャリア学習に特化したコース別学習（以下の10コース）を展開した。

- ①漢字学習コース
- ②ビジネス文書実務検定コース
- ③電卓実務検定コース
- ④英語検定コース
- ⑤学力向上コース
- ⑥キャリアワークコース
- ⑦とくしま中央一座コース
- ⑧ものづくりコース
- ⑨防災対策研究コース
- ⑩ニュース時事問題研究コース

2) 「とくしま中央一座」コースの枠組み

上記のような10コースを開設しているが、中でも⑦に挙げた「とくしま中央一座」コースは、全国でも例の少ない本校独自の取組であり、これを活用して授業実践に取り組んだ。本コースの枠組みは

令和元年度「総合的な学習の時間」とくしま中央一座コース年間計画			
1 とくしま中央一座の活動目的とわらい			
(1) キャリア教育実習の一環として			
・2年次からの「総合的な学習」コース別の授業			
・生徒自らの主体性を育てる部活動としての取り組み			
(2) 目的（人形劇や絵本の読み聞かせを通して）			
・自分のことを自分でできる力（自己理解・自立心）を育てる			
2 本年度の目標			
(1) 現代人形劇という芸術的表現活動を通して、図画・工作・歌・シナリオをグループワークによって創作し、練り上げ、絵本童話の世界を三次元化する。			
(2) 外部公演というボランティア活動を通して、異世代間の交流を図ると共に社会貢献を果たすことで自己有用感を獲得し、社会的存在価値を見出す。			
	人形劇	絵本の読み聞かせ	時間
5月	・人形劇を演じることの意義について ・題材を絵本「おおきみだてきをつけて」に決定 ・テーマについて確認 (著作権許可申請) ・脚本の執筆 ・役柄・役割についてのミーティング・脚本の読み合わせ・校正	・絵本図書を選定 ・絵本図書の注文 ・絵本の読み込み（朗読練習）	
6月	・脚本の読み合わせ・校正 ・舞台装置づくり ・人形製作 ・脚本の読み合わせ	・絵本の読み込み（朗読練習）	3
7月	・舞台装置づくり ・人形製作 ・脚本の読み合わせ・修正 ・オリジナル作品制作 「大草原のゆかみななかまたち」 「ゴキブリプーリ」	・読み聞かせ実技研修会 ①心構え ②発声練習 ③読み聞かせのTPO ④エプロン・シアター練習 ⑤実演練習	部活動
8月	・大道具製作 ・脚本の読み合わせ・修正 ・ミーティング ・上演練習 ・附家書店（国府店）にて外部公演 8/24	・絵本の読み込み（朗読練習）	部活動
9月	・上演練習	・絵本の読み込み（朗読練習）	2
10月	・上演練習	・上演練習	2
11月	・上演練習 ・中央祭（文化祭）上演会 ・テクノスクール文化祭コラボ 11/9 ・阿波市ぶんぶんまつり参加 11/24	・上演練習 ・中央祭（文化祭）上演会	2
12月	・上演練習 ・NPOにんじんの会 12/8 ・保育園にて上演会（2カ所） ・阿波市吉野図書館公演 12/21	・上演練習 ・保育園にて上演会（2カ所）	部活
1月	・上演練習 ・保育園にて上演会 ・障がい者施設にて上演会	・上演練習 ・保育園にて上演会 ・障がい者施設にて上演会	1
2月	・とらまるパペットランド研修 2/9 ・反省会；現代人形劇という芸術的表現活動を通して、図画・工作・歌・シナリオをグループワークによって創作し練り上げ、絵本童話の世界を三次元化する。	・とらまるパペットランド研修 ・反省会	部活

図1 授業計画



図2 「とくしま中央一座」10周年記念看板

以下の通りである。

- ①履修学年と単位数：2年次～4年次，通年・1単位
- ②授業曜日・時間：金曜日，午前部・4限目，午後部・8限目
- ③総授業時間数：12時間（1コマ40分）
- ④授業期間：5月24日～1月10日
- ⑤履修生徒数：午前部生5名，午後部生5名
- ⑥授業計画（図1）

今年度は、絵本作品を題材とした人形劇団「とくしま中央一座」が発足して10周年を迎える（図2）。初演ロシア民話『まんまるパン』を皮切りに、以来、『赤ずきん』『ブレーメンの音楽隊』『三匹のコブタ』『おおかみだつてきをつけて』『がまくんとかえるくんシリーズ～おてが

資料1 振り返りシート

今日の授業について振り返ってみよう!!

名前 _____

◎次の3つの質問について、今日の授業での活動を振り返って書いてください。

1 あなたは今日の活動に満足していますか？

とても まあまあ あまり まったく
あてはまる あてはまる あてはまらない あてはまらない
4 3 2 1

その理由は _____

2 あなたの活動は将来に役立つと思いますか？

とても思う まあまあ思う あまり思わない まったく思わない
4 3 2 1

その理由は _____

3 今後、この活動を頑張ろうと思いますか？

とても思う まあまあ思う あまり思わない まったく思わない
4 3 2 1

その理由は _____

み』『がまくんとかえるくんシリーズ～クリスマス・イブ』『おおかみのおなかのなかで』『わたしのワンピース』『こぐまちゃんのほっとけき』『くわせろ』『くねくねさんぽ』等の名作絵本童話を手がけ、上演にこぎ着けた。一方、『赤ずきんとブレーメンの音楽隊』『赤ずきんと三匹のコブタ』『まんまるパン～その後のお話』『大草原のゆかいな仲間たち』『ゴキブリーブリー』『チンアナゴのきょうだいとクリスマス』と、人形劇団としてオリジナル作品にも着手し、公演した施設で好評を得ている。

3) 検証方法

平成28年度から鳴門教育大学の支援を得て活動のプログラム化を図り、人形劇団と読み聞かせ隊のスキルを向上させるため、毎授業後に振り返り（資料1）と自己肯定感を測定し（資料2）、生徒自身の検証と評価を実施し、データを蓄積するとともに、主体的対話的深い学びへと繋げている（図3）。

3. 結果

他者と繋がる機会を保障する学習として、人形劇団「とくしま中央一座」の活動に取り組んだ。

(1) 目的・ねらい

中学時代、いじめや不登校を経験した生徒たちが、本活動を通してソーシャルスキルを高め、自らの自信を取り戻し、生きる力を蓄え、誇りと貢献心をもって社会に

資料2 自己肯定感尺度アンケート用紙

学年 _____ 年 組 番号 _____

質問に対して、自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。「あてはまる」場合は4、「どちらかといえばあてはまる」場合は3、「どちらかというあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を○でかこんでください。

No	項目	回答
1	私は今の自分に満足している	4—3—2—1
2	人の意見を素直に聞くことができる	4—3—2—1
3	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる	4—3—2—1
4	私は自分のことが好きである	4—3—2—1
5	私は人のために力を尽くしたい	4—3—2—1
6	自分の中には様々な可能性がある	4—3—2—1
7	自分はダメな人間だとは思わない	4—3—2—1
8	私はほかの人の気持ちになることができる	4—3—2—1
9	私は自分の判断や行動を信じていることができる	4—3—2—1
10	私は自分という存在を大切に思える	4—3—2—1
11	私には自分のことを理解してくれる人がいる	4—3—2—1
12	私は自分の長所も短所もよく分かっている	4—3—2—1
13	私は今の自分を好きに思う	4—3—2—1
14	人に迷惑がかけられないよう、いったん決めたことには責任を持って取り組む	4—3—2—1
15	私には誰にも負けないもの（こと）がある	4—3—2—1
16	自分には良いところがある	4—3—2—1
17	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している	4—3—2—1
18	私は自分のことは自分で決めたいと思う	4—3—2—1
19	自分は自分の役に立っていると思う	4—3—2—1
20	私には自分のことを必要としてくれる人がいる	4—3—2—1
21	私は自分の個性を大事にしたい	4—3—2—1
22	私は人と同じくらい価値のある人間である	4—3—2—1
23	様々なことを自分で感じ、考えていると思う	4—3—2—1
24	自分の気持ちや考えを表現していると思う	4—3—2—1
25	他者と協力してものごとを進めていると思う	4—3—2—1
26	多様な価値観を認め、尊重していると思う	4—3—2—1
27	様々なことに自ら進んで取り組んでいると思う	4—3—2—1
28	私たちは将来の世代に対する責任をもっていると思う	4—3—2—1

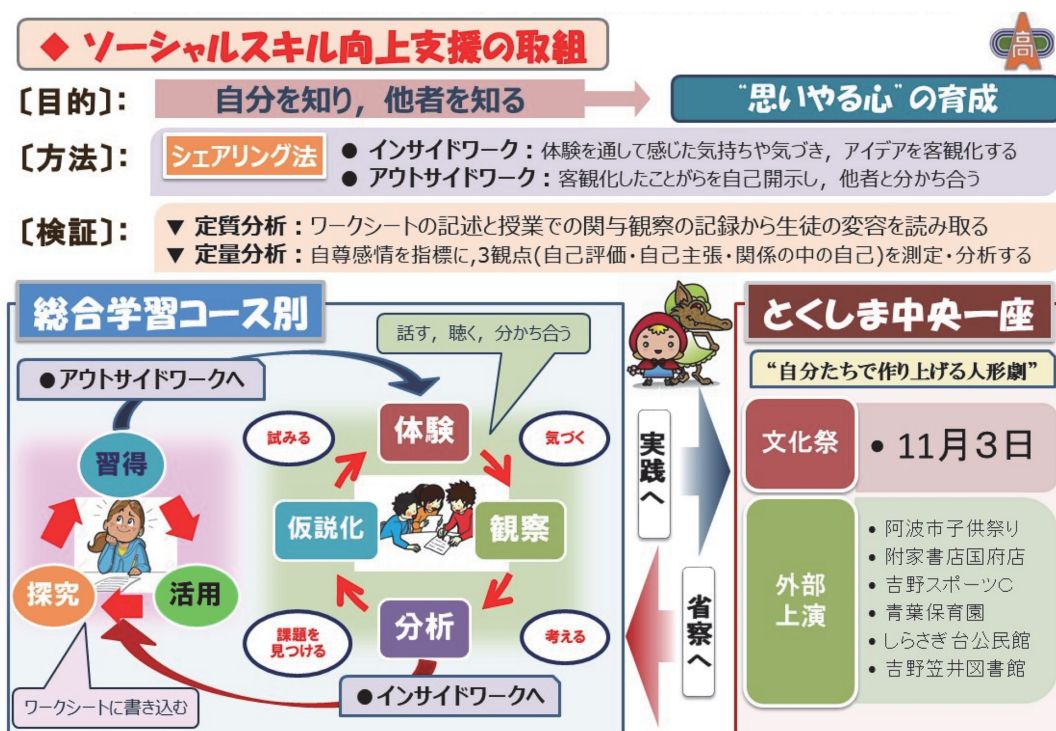


図3 実践研究の枠組み

役立ちたいと思える生徒の育成をめざしている。

(2) 活動内容

「とくしま中央一座コース」は、「人形劇」と「絵本の読み聞かせ」の2つの芸術表現活動を行う体験活動型学習プログラムである。履修した生徒達は、校内文化祭での発表以外に、保育園や障がい者施設、図書館、書店等での上演会及びその後の交流活動を通して、コミュニケーション力を高めながら社会性を培う。舞台は校内で行われる文化祭を皮切りに、外部公演を年間10回程度開催した。その経験の積み重ねが自己理解に繋がり、成就感や自己有用感の獲得に効果を期待できる。活動の過程で生徒達は、これまで未体験だった舞台づくりのための試行錯誤や切磋琢磨のせめぎ合いを繰り返す。その経緯の中で生徒一人一人が困難に立ち向かう問題解決の能力や、自分たちの求める舞台を実現するために必要なものを見極める力を育て、自らの進む道を切り拓く力、すなわち自己実現のための意志決定力を獲得することに繋がっていくのである。

(3) 上演作品

本年度は、マック・バーネット(文)、ジョン・クラッセン(絵)『おおかみのおなかのなかで』(図4)と、劇団オリジナルの3作品『大草原のゆかいな仲間たち』(図5)『ゴキブリブーリ』(図6)『チンアナゴのきょうだいとクリスマス』(図7)を人形劇による上演作品とした。

(4) 人形劇を創作する具体的な手順

- ①原作となる絵本の選定(著作権の許諾を得る)
- ②キャラクターの役割分担を決める
- ③台本づくり&読み合わせ(原作からのシナリオ化とアレンジ)



図4 『おおかみのおなかのなかで』より



図5 『大草原のゆかいな仲間たち』より

- ④主題や作品を演じることのねらいの確認と共通理解
- ⑤パペット人形の製作もしくは調達，小道具・大道具づくり，BGM・歌・効果音の製作
- ⑥舞台稽古，シナリオの修正，追加
- ⑦本格的な舞台稽古（立ち居振る舞い，所作，舞台道具の位置の確認）

「どうすれば，より面白くなるか？」という視点で，セリフやパペットの動き，BGM・歌・効果音の製作を修正したり，追加を重ねたりしていく。セリフが覚えられ，パペットの動きが体得できるまで，繰り返し練習する。

(5) 上演及び交流施設

みどり保育園・青葉保育園・北島田保育園・八万東保育園・障がい者授産施設「れもん」・しらさぎ台街づくり活動センター・えくせれんと鴨島（デイサービス施設）・徳島県人形フェスティバル・阿波市吉野笠井図書館・土成図書館・阿波市吉野スポーツセンター・附家書店・徳島県高等学校人権研究大会生徒発表・全国高等学校文化祭人形劇部門（平成30年度）

(6) 自己肯定感と振り返りの分析結果

自己肯定感尺度によるアンケート結果から，第1回測定時（図8）より，第2回測定時（図9）の方が3観点のすべてにおいて上昇した。上記アンケートにおける各28項目について，授業者が常日頃から意識付けを行ってきたし，それぞれメンバーが努力を重ねてきており，自

覚と自信が備わってきたことが数値上昇の要因であると考えられる。分析した際，個々には3観点のバランスに偏りの見られる生徒もいたが，受講生徒全体の平均からは，3観点にバランスのとれた向上が認められた。共に育ち，共に補い，人形劇団としてのチームワークが取れていた証と捉えられる。

また，毎活動終了時には振り返りシートに記入し，受講生が一人ずつ発表をしてシェアリングを行った。評価の観点は，「あなたは今日の活動に満足していますか？」という満足度（図10），「あなたの活動は将来に役立つと思いますか？」という有用感，「今後，この活動を頑張ろうと思いますか？」という効力感であった。

上記のうち，満足感については授業回を重ねていくごとに，満足度が上昇した。その理由について，1月10日に満足度4に回答した生徒達の記述からは，「失敗しても次の公演では成功できたり目標が達成できたから良かつ

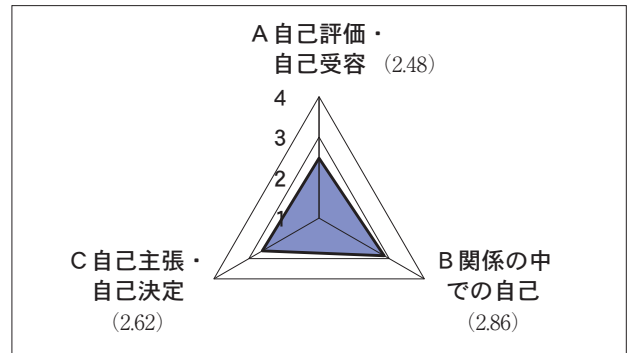


図8 自己肯定感尺度（2019 / 06 / 17測定，N = 10）

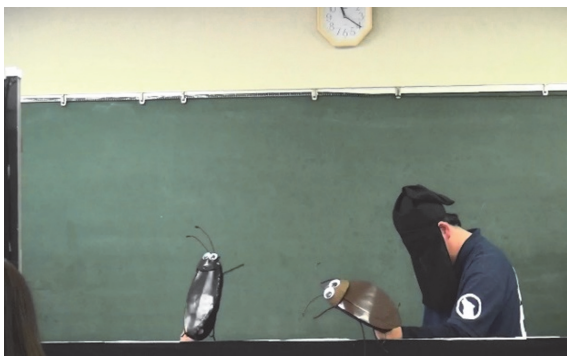


図6 『ゴキブリブーリ』より

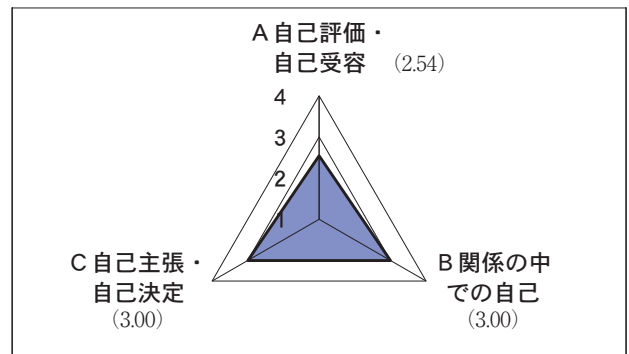


図9 自己肯定感尺度（2020 / 01 / 15測定，N = 10）

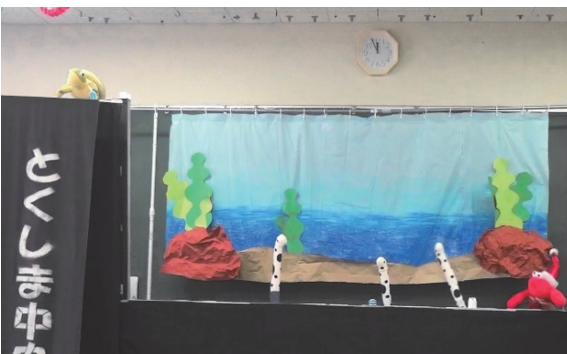


図7 『チンアナゴのきょうだいとクリスマス』より

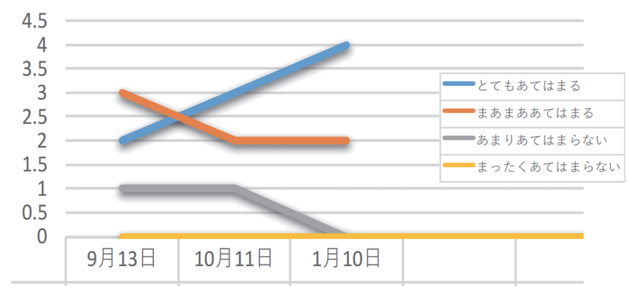


図10 授業に対する満足度の推移（M = 10）

た。」といった公演に成功した達成感、「みんなで協力して楽しくできたから満足しています。」「人形劇が上手くできたし、後の交流会も有意義だったから。」といった協力した連帯感、「観客にも喜んでもらえたと、一生懸命頑張ったと言える1年だったから。」といった他者からの賞賛による有用感を感じたことが推測された。

(7) 成果と小括

授業実践の成果として3点を挙げる。第一に、対人面で過度の緊張を感じていた受講生徒たちが、人前で人形劇を演じることで、物怖じしない自信を獲得し、フロアの見知らぬ人々との一体感を持ち、上演後にも異世代間交流を図ることで、社交性を高めることができた。また、受講生徒たちで協働して物事を成し得ることの大切さを学んだことである。

第二に、普段の会話にも支障をきたしていた受講生徒が、見守りの対話活動（穏やかな口調、相手を受け入れるという姿勢）をグループワークの中で行ってきたこと、そして、人形劇の活動を通して自分に自信が持てるようになったこと等により、日常会話においてスムーズに会話ができるようなスキルを習得したことである。

第三には、何事にも否定する場面や後ろ向きな発言の多い傾向を示していた受講生徒の一人が、本授業活動によってポジティブな言動が増え、自己変容が認められたことである。

以上の成果が上がった要因の一つは、グループワークによる効果と考える。各授業の終了時に受講生と授業者が全員で自分自身への振り返りを行い（インサイドワーク）、他者から評価を受けての振り返り（アウトサイドワーク）によるシェアリング法を反復して実践したことが効果的であったと考える。仲間と心をつなげて、絵本（ファンタジー）の世界に浸り、それに対する思いを語り合うという作業を繰り返すことにより、個々のソーシャルスキルを磨きながら、人形劇としてリアルに体現することを通してセルフトレーニングしていたと考えられる。

4. 考 察

(1) 人形劇を「創る」「演じる」ということ

受講生徒の多くが小中学生時代に不登校を経験していることもあり、人前での表現は過度の緊張を伴うが、脳を活性化させ、心を喜びで満たす体験となる。外部公演で認めの手拍を他者（フロア）から受けると、喜びが充実感を伴って心に迫り、魂の癒しをもたらす。それは、傷ついた精神を再生へととぎやない、心理療法さながらの効果を生んでいる。継続しているうちに、自己という存在に気づき、自己をメタ認知できたことで周囲の世界が見

えるようになり、他者とつながることの尊さや価値を知る。これまで感受性を閉ざしてきた受講生徒たちにも、「自分も人のために役に立つことができる」といった利他心や奉仕の精神が芽生える。結果として、情熱・感謝・思いやり等々、目に見えないものに対して意識が及ぶようになり、「この世界は全ての存在が、人や物、自然界とつながって生きている」ということを理解する。授業者は、そのことを生徒たちに言葉で伝え、感覚的に意識がもてるように導いてきた。童話や芸術と呼ばれるものを生み出してきた先人からの言葉や思い（想い）や世界観が時空を超えて人形劇として体現されるとき、心があらわれるような魂の発露を感じる瞬間やハートウォーミングな（心温まる）ひとときを味わうことが可能となる。

授業者も受講生徒たちと同様にファンタジックなロマンを感じずにはいられない。そして、過去・現在・未来へと日一日と変容し続ける自らと世界を慈しむ態度を共に涵養したいと願っていた。小中学校時代、「学校」という場所から置き去りにされてきた受講生徒たちと、上記で掲げた目的に加え、再び「学校」という場所で学校生活を取り戻す営みとして、この授業活動を展開しているのではないかと思える。

(2) 忌避意識を払拭することについて

「とくしま中央一座」を通して、授業者がなぜ忌避意識の払拭を念頭に置いて活動を継続・展開してきたか。それは、協力校に向けられる社会に根ざされた厳然としたマイナスイメージが数年前まで往々にして在ったからである。

現在は、ネット上にアップされた協力校の口コミを見ても、心無い書き込みは減り、年々、協力校に対する評価も上昇しているものの、4～5年前に遡れば、2チャンネルや学校裏サイト掲示板では悪辣で差別的な書き込みで溢れ返っていた。故に、協力校に対する偏見や差別意識が横行し、露骨な誹謗や中傷が生徒に浴びせられ、そのような高校に中学からの輪切りの状態で入学し通学を余儀なくされた生徒たちは、必然的に胸を張れなかったし、卒業しても母校であるということに誇りが持てなかったのである。

授業者は、そのような協力校の在り様を、在職してこれまでの18年間見続けてきた。生徒たちが一歩校外に出れば差別や偏見に直面し、憂鬱を抱えて生活していかねばならない状況を何とか克服し、人としての尊厳と生きる喜びを会おうすべての人と分かち合える存在として世に送り出したいという願いを持ち、この人形劇の取組を推進してきたのであるが、その着眼した点は次の通りである。

まず、如何にして社会に根ざした協力校へのマイナスイメージを払拭するか。この点に着目し、人権教育で取

り組まれている「ケガレ観」の払拭を目指した私たちの活動と営みとを考えた。絵本によく嫌われ役として登場するオオカミを、肉食性としての立場を理解してもらえようようなシナリオを考えたり、ヒーロー的存在として演じたりすることにより、またそれを意図して演じることで、観劇するフロア側の理解を求めようとしたのである。同様に、連作の人形劇においてヘビやゴキブリなど、嫌われキャラを主人公に据え、物語を創ることに拘った。

協力校の生徒には、自尊感情が乏しい生徒が多く見受けられ、自己効力感をもつ生徒も少ないと感ずる。それはどうしてなのか。当然のことながら、上記に書いたような協力校生徒へのマイナスイメージが、影響しているのであろう。ならば、そのイメージをどうにかしてプラスに転換させ、解放された自己認知をさせて社会へと飛び立たせたいというねらいが授業者にはあった。嫌われキャラのイメージ払拭が、同時に協力校や生徒たちのイメージアップに繋がることを信じ、保育園、障がい者施設、高齢者施設、公共図書館、書店、テクノスクール等と公演の幅を広げ、人形劇の上演活動を続け、10年の歳月が経過した。

その軌跡を辿り振り返った時、幾千もの出会いとふれあいと、そして、人との繋がりが私たちにもたらされ、私たちを包含する社会と生徒たちの意識とが変容したことが実感される。継続する力が理解者を生み、仲間となり、ずっと繋がって行くことで温かな人間関係が構築され、協力し合うことでより良いコミュニティが創造されてきたと考える。

5. 今後の課題と展望

以上、一つのキャリア教育としての「とくしま中央一座」の取組の一端について検討した。今後の課題としてこれからの方向性を4点挙げておきたい。一つ目は、人形劇団としてのチーム力の向上と芸術性の高揚をめざすことである。二つ目は、受講生徒一人一人の人格の陶冶と意思決定能力の獲得をめざすことである。三つ目に、受講生徒一人一人が利他心を養い、人々と繋がり、将来的に社会へどのように貢献して行くのかを模索して行くことである。四つ目は、授業を担う指導者の育成と、指導を行う上での専門性の向上を図ることである。

こうした方向性をもたせることにより、これからの「とくしま中央一座」の活動を通じた学びをもとに、生徒たちは自らの意思で自らの特性に合った進路決定を確実に果たし得るだろう。ある者は芸術の分野へ、ある者は福祉や公務員の道へと逞しく歩みを進めていくことを期待したい。私たち教職員は、一人一人の将来への方向性を共に見つめ、今後もしっかりと寄り添い、成長を見守って行きたいと考える。

謝辞

本研究に際して、徳島県立徳島中央高等学校の大住満寿夫校長をはじめ教職員の皆さまに多大なるご協力とご支援を賜りました。また、受講生徒の皆さんにはともに授業実践に取り組んでいただきました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

文献

- アーサー・ビナード(文)、田島征三(絵)、『わたしの森に』、くもん出版、32p.、2018.
- マック・バーネット(文)、ジョン・クラッセン(絵)、なかがわ ちひろ(訳)、『おおかみのおなかのなかで』、徳間書店、40p.、2018.
- 文部科学省、『持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)』、<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm/>(アクセス確認2019.12.19)
- 日本ホリスティック教育協会、今井重孝、金田卓也、金香百合(編)、『ホリスティックに生きる～目に見えるものと見えないもの～』、せせらぎ出版、188p.、2011.
- 葉祥明、『地平線の彼方』、愛育社、185p.、1997.